
愚者どもの宴

笹ヶ根伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者どもの宴

【Nコード】

N3523Z

【作者名】

笹ヶ根伊都

【あらすじ】

戦争により滅ぼされた国の姫君をめぐるファンタジー。

プロローグ

僕はランディ・ペクセル。

ファルティアの宝玉って言えば、君は分かるだろうか。

そう、ご存じない。

これだから、無学な奴はしょうがないんだ。

まあいいや。僕も退屈してるところだ。

少しつきあってやろう。

僕の主は、名前を聞けばたいいみんな分かる。

いいよ。知らないんだろう。

カイン・クレスバール。本当はこの後やたらめったら長いんだけど、名前なんてのは記号さ。

ここでは必要ない。

年は19。大人の男だ。柔らかい金茶の髪。翡翠の瞳。すつきりと長い手足。

こちらは、ファルティアの至宝だそうだよ。

どうして世間はたとえ名が好きなんだろうね。全く。

この男は頭もいいし、剣をとつても弓を引いても一流だし、頭も悪くなくけりや性格もなかなかいいと思ってる。

だけど、天の神様が2物は与えても完ぺきな人間を与えてくださらないのは慣例通りで、こいつは稀代の女つたらし。

何度、この僕も寝室で見えてはならないものを見てしまったことが。

あー、ぶるぶるぶる。

悠然とした足音が聞こえてくる。

それにくつついてがみがみとお小言を言っている声がするだろう。

あれは、カインの幼馴染でリナルド。

貴族だかなんだか知らないが、カインと正反対のとてもお堅い男だ。もう寝室の前だっというのに、ほら、まだやってる。

ご婦人とお戯れにするのも金輪際にしてくださいとかなんとか言っ

ているのだ。

いくら言ってもカインには効かないって。

ああ、やんなっちゃう。

扉が開いて、カインが入ってくる。

少し着崩した襟元が気だるげそう。

ふわりといい匂いがした。作られたその花の香りは移り香というもののらしい。

翡翠の瞳がこちらを向いた。

「待ってくれてたのか？ランディ」

いい子だ。優しい声でカインが言った。

カインは僕を優しく連れ出し、豪華な寝台の上であおむけになった。組んだ足が優美な形だ。

長い指が僕の頭を優しくなでた。

僕は見上げて、その長いまつげに小さな水滴が溜まっているのに気がついた。

どうしたのだろう。

この人が泣くななんて、母親を亡くして依頼じゃないか。

「心配してくれるのかい」

黙しているとは僕を胸の上に乗せられた。温かくて思わず目を閉じる。

「むかし、むかし。あるところに一人の王子がいました。王子の父は隣国の王と従兄同士でした。その国にはお姫様がいました」

知っている。僕もその人のことを見たこともあるし、その優しい腕に抱かれたこともある。

黒い髪に白い肌。琥珀の瞳。気高く、賢い少女。

「美しい姫に、王子は恋をしました。けれど、王子はそれを隠さねばなりませんでした。姫は大国の王のもとに嫁ぐことが決まっていた。王子は姫の気を引こうといういろいろいたずらをしました。けれど、王女は顔色一つ変えず王子の相手をしてくれました。何も告げることなく時が過ぎ、姫も王子も大人になりました。姫の婚礼の

日、王子は国境の軍役につくことを選びました。出立の日に、姫が便りをくれましたが、王子は受け取りませんでした。軍役は終わり、故郷に戻った王子は姫が行方知れずとなったことを知りました。姫の行列は嫁する国につく途中で国籍不明の兵に襲われ壊滅。その後、隣国も大国に滅ぼされていました。何より王子をおどろかせたのは、この凶事に王子の義母がかかわっていたことでした。」

僕は黙って、カインの腕に頭を寄せた。

「今夜、義母上付きだった女官のところに忍んで行って分かったんだ。恐ろしい義母上だよ。僕が心を寄せるものをすべて奪っていく。僕は小首を傾げた。そんなこととくに分かっているはずだろう。長い指が僕の顎を持ち上げた。目をしばたかせていると、柔らかい唇が頭に落ちてくる。」

「ランディ。お前はずつとそばにいてくれるだろう。」

カインが他のヤツにこんな口調をしたところを僕は知らない。

あのリナルドにさえも。

そう思うと、僕の心臓はきゅっとなる。

神様はこいつに大事なものを与え忘れたんだ。

美しい器、地位や権力でないもの。

何を？って聞かれると難しい。

そうだな。僕が神様ならたぶんカインにあげると思う。

還るべき優しい緑の木陰を。

僕はもどかしく思う。

だって、僕にはそれをあげられない。

寄り添うしかできない。

だって、僕は神でもなければ人でもない。

僕はランディ・ペクセル。ファルティアの宝鳥。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3523z/>

愚者どもの宴

2011年12月12日00時54分発行